

宋代の地圖と民族運動

增 田 忠 雄

序 論

地圖が政治軍事上の方策實施に當り、必要缺くべからざるものであることは今更述べるまでもないことであるが、これが國民思想との關聯に就ては、あまり今迄、一般に注意せられてゐなかつたので、茲に小文を製し、大方の批判を仰ぐ次第である。

ある國家が一定の文化段階に達し、その國民の全部でなくても、指導的な知識階級が國民たるの自覺をもつに至つた時に、國土は自己の國土であると云ふ精神的な自覺に發展する。即ち國家と國民と國土が統一された觀念となつた時に、その國土を表現する國家全圖は國民の國家觀念の具體的な表現として、そこに分離することの出來ない國民的一體觀を構成するに至る。従つてもし歴史的地理的に與へられた運命的な國民の生活圏に擴大縮少の現象が起ると、これが國家全圖として表現された時、この圖自體が國民の國家觀念に自負心又は屈辱感を與へる作用をもつに至る。これ古來より、國家的自覺を必要とした時代又は段階に達した國家に於ける、その版圖全圖の國民思想に對してもつ

特殊な意義である。

しかし、國家全圖が、かゝる文化的作用を獲得するためには、國民知識層と接觸すべき技術の發達が必要である。即ち先づ、知識層間に地圖の表現と文字の理解があることが前提となつて、知識層の集合する學校に、又國民大衆の集合する寺廟、祭禮等に對する働きかけとなり、石碑その他の方法による揭示より始つて、印刷術の發達後は印刷地圖類の流布となり、地圖の持つ具象的な屬性の故に、繪畫宣傳の如く、知識層を乗り越えて一般大衆に對して強き作用をもつに至るのである。

特に近代の如く急速なる技術の發達と教育の普及は、廣大なる國家も、容易に統一ある國民思想を形成せしめるに至つた。即ち、國內交通機關の完備、特に航空路の發達は點的な政治軍事文化支配力の面積的擴散となり、新聞雜誌、映畫等の普及は國民各層に對する浸透となり、ラジオのもつ同時性は、距離的觀念を打破して全國民一體觀を養成することゝなつた。實に國家全圖は、かくて形成せられた國民思想の具體的根柢をなすものである。

イギリスの國家全圖が世界地圖であるところに、彼等國民の國家に對する無限の信頼と自負心とがある。日本も辛ひなことには國家全圖を發展的に觀察する時に、この國民のであることに高き名譽を感じるのである。しかるにヴェルサイユに於て分割された歐洲各國の政治地圖は、ドイツの地政學者がゲルマン民族分布圖をその上に重ねることによつて、何等の作爲もなく地政學的意義を獲得した。ハンガリーでは前回の世界大戰前後の地圖を重ねることによつて、國民精神を作興した。タイ國では隣接各國に割讓した失地の地圖を製作して、各小學校に配布した。

支那では民國十六年、國民政府成立後、盛んとなる民族主義は反帝主義となり、普及せる教育機關を通じて排外教育が行はれ、これに支那全圖が利用せられたことは勿論であるが、一般出版物としては次の如きものがある。即ち民國十九年九月には、各國在華交通侵略圖が製作され、滿洲事變の勃發した民國二十年の十二月には早くも日本侵略我東北地圖が出版され、これに續いて、中日對峙形勢圖、中華國恥地圖等^①が續々出版され、民族運動の具體的資料として地圖が利用せられた。

民國二十二年出版の中國分省新圖には、東北四省を舊名のまゝで入れ、滿洲建國後の鐵道線路などの補正を試みながらも、その序文に

……風雲變色、遼吉黑何在？熱河何在？長城壞矣、吾中華民族、精神一日不死、則必有還城河山之一日

と記してゐる有様である。こゝに支那に於ける民族運動の根強さを見るのであつて、かゝる教養を受けて徐々に組織立てられた支那の民族思想は遂に民國二十六年（昭和十二年）七月に至り、支那事變といふ重大な結果となつて現れた次第であるが、適々、この年正月、杭州に遊んだ筆者は、その郊外の古刹、雲林寺の人馬往來繼るが如き門前に「東北四省失地之圖」の大地圖が掲げられてゐるのを見た時に、來るべき事態が豫期せられたのであつた。

地圖をかゝる目的に利用したのは、同じく民族的危期に直面した南宋の時代であつて、しかもこれ等の地圖が現在に残存してゐることは興味が深く、従つて本稿に於ては主としてこの宋代の全國地圖と民族運動の關係に就て述べるつもりである。

本論

漢代以後、北方民族の侵入によつて混亂を見た支那が、再び唐代の盛時を迎へて漢民族の中興が行はれ、その貞元十七年、この盛況を具體的に圖示する漢民族の世界圖が製作された。これ即ち賈耽の海内華夷圖一軸(廣三丈、縱三丈三尺)であつて、華夷圖と稱してゐる處にもその世界圖たる意識が出てゐるのである。従つてこの盛唐より遙かにその版圖を縮小した宋代に於ては、支那全圖の製作は主として、この唐代の全圖の複製を試み、漢民族の盛時をしるぶより外はなかつた。

宋代に於ても、その前時代に支那全圖を製作する時と同じく地方圖を基礎として製作が行はれたが、これは官廳祕庫奥深く藏されて、こゝに問題とする一般の教養に關するものとしては、唐代の地圖が複製されたのであつた。例へば宋史卷三百六の列傳第六十五にある樂黃自傳に

所撰又有……掌上華夷圖一卷

とあり、賈耽華夷圖の縮小したものと考へられ、又現在、西安碑林に残れる禹跡圖、華夷圖の如く、賈耽の華夷圖の約十分の一に縮小したものが、唐の舊都長安に流布してゐたと見られる。

それは後述の如く鎮江府學に最近まで現存した禹跡圖の銘文に「元符三年正月依長安本刊」とあることによつても、北宋の元符年間、長安にかゝる唐代の支那全圖が流布してゐたことを知るのである。

現在、西安の文廟西部の舊府學境内北端にある碑林中に存する禹跡圖、華夷圖は、かゝる北宋の末年、長安に流布した地圖を石刻したものと考へられる。即ち兩圖とも約三尺四方の圖であつて、禹跡圖には方格があり、上端に

禹跡圖 每方折
地百里

禹貢山川名

古今州郡名

古今山水地名

阜昌七年四月刻石

とあり、長城以南を詳記し、長安を京兆とし、北宋の四京、即ち東京(開封)、西京(洛陽)、南京(歸德)、北京(大名)を記して居り、宋代補修の地圖に依ることは明かである。そしてこの禹跡圖の銘文が後述の如く鎮江の禹跡圖とその文字の配置も全部同じであり、その大きさも同様である點より、この兩地の禹跡圖は、元符三年(西曆一一〇〇年)の長安本禹跡圖に依つたものであることは間違ひなきものと思ふ。

同じく西安碑林に現存する華夷圖は、方格なく、従つて圖形は崩れてゐるが、長城外その他、西方では葱嶺、南方では印度、東方は朝鮮に及び、四周に各夷國を説明して、華夷圖たるの實を示してゐる。これ等の記載は、賈耽即ち唐代の地理的知識を示したもので、たゞ宋代交渉の多かつた契丹を大遼國と記してゐる處に、北方の新資料に依つて補正が行はれたことを推察せしめる。特に北宋時代、北方民族の侵入に備へて、河北東西路に配置した、保順、保定、

廣信、信安、安肅、永定、乾寧、永靜、順安等の各軍の地名の記載があり、洛陽は河南とあるが、あとの三京の記入もあり、かゝる點よりも、本圖の原圖が禹跡圖と同じく、元符年間、長安に流布してゐた地圖に依れることを推察せしめる。

しかるに、當時四川に於て出版せられた「歷代地理指掌圖」二卷がある。本書は、四十四の圖幅より成り、卷末に四川成都府市西俞家印

の文字がある。本書に於ては陳振孫の書錄解題に蜀人稅禮安が元符年中、この書を朝廷に上らうとして、未だ及ばずして死んだものであると説明してゐる。本書中に「古今華夷區域總要圖」があり、賀昌羣氏の調査によると、西安華夷圖と全く同じであると記してゐる。従つて、この圖は元符三年の長安本禹跡圖と何等かの關係があるかも知れない。

西安にある華夷圖の銘文は一般にあまり紹介せられてゐないので、その主要部分を判讀して記すると次の如くである。

本圖は前述の如く、四周に各夷國の説明があり、右下端に、本圖製作の目的を示した左の如き銘文があるのである。
 (前略) 漢之盛時四履之地、東樂浪、西燉煌、南日南、北鴈門、西南永昌、東西九千里、南北萬三千里、晋承三國之後、冠帶之國、盡秦漢故地、隋之世東南盡海、西抵且末、北距五原、唐初分爲十道、及乎高昌、拓四鎮、比之漢代、南北則同、東不及□、西過之、□□之地皆受節制、宋分爲二十三路、其四方蕃夷之地、唐賈魏公圖所、載

凡百餘國、今取其著聞者載之、又參考傳記、以叙其盛衰本末、至西、有沙海諸國、昔漢甘英、至條支、臨西

海、而還、所記止於大秦、西北有奄蔡、北有匱利幹、皆北距大海、東北有流鬼、不知其北、以其不通名貢、而無事於中國、今略而不載、阜昌七年十月朔、岐學上石、

こゝで先づ注意すべきは華夷圖の石刻年月が阜昌七年十月で、禹跡圖が同じく阜昌七年四月であることである。阜昌とは北宋滅亡後、金がその民族政策上、投降した漢代劉豫を皇帝として黃河流域に一時建設した綏衝國齊の年號であつて、阜昌七年の十一月、即ち華夷圖石刻の一箇月後には金は齊國を廢止して金の屬地とし、「劉豫の弊政を除去す」と稱してゐる。^⑤即ちかゝる際に、金によつて建設された齊國に於て、漢民族の盛況を示す唐代の地圖が複刻され、前掲の華夷圖の銘文に明かな如く、歷代漢民族による國家の疆域を追憶し、宋代はその四方は蕃夷之地と稱し、何等金國の存在を記せず、消極的な民族的反抗を示してゐる。しかし後述の南宋蘇州の地理圖の銘文の如き積極的的民族意識を表現してゐないことは、金の支配圈内にある齊國として止むを得ない處であらう。

齊國の時、劉豫は自己の出身地東平(山東)を東京と稱し、宋の東京即ち開封を汴京と命名してゐるが、本圖には何等かゝる齊國の存在を示すが如き補修は見られず、金の存在は勿論示してゐない。

更に華夷圖銘文末の「岐學上石」の語は金石萃編の編者の云ふ如く「由學校中、得此一圖舊本、刻石以示諸生耳」と解すべきか否かは問題であるが、少くともこの時に當り、漢民族の盛況を圖示して、學生に示したものであることは間違ひのない處であらう。即ちこの西安の碑林の位置は、隋唐の時代の國子監のあつた處であつて、宋代には京兆府學があつたと考へられ、乾隆年間の關中金石記にも、これ等の圖は西安府學に在りと記し、歷代學校のあつた處であつ

て、この齊の時も學校であつたであらうと思はれる。

従つてかゝる知識階級の集合する學校に、漢民族の世界圖を石刻揭示せることは、彼等知識人の間に金に對する消極的な反抗があつたことを示すもので、金によつて建國した齊の内部に、漢民族としての民族意識が容易に衰へなかつた有様が觀取され、金史には齊皇帝劉豫の弊政によつてこの國を廢止した如く記してゐるが、その實狀はかゝる民族的反抗が一つの原因となつたのではないかと推測される。

さてその後數年にして、南宋の紹興十二年(一二四二年)、江南鎮江府學にこの禹跡圖が建設されてゐるのである。これは江蘇金石志稿、金石十一によれば縦横三尺四方の大きさで、その銘文には

禹跡圖 每方折地百里

禹貢山川名

古今州郡名

古今山水地名

元符三年正月

依長安本刊

紹興十二年十一月十五日左迪功郎

充鎮江府學教授俞簾重校立石

とあり、^⑥前半の銘文配置、及びその大きさは全く西安碑林の現存禹跡圖と同じで、この原本が元符三年(一一〇〇年)に長安で刊行されたことを知るのである。即ち西安及び鎮江の府學にある禹跡圖は兩者共に、元符三年の長安刊本禹跡圖に依つたものたることは確實である。宣統年間の江蘇金石志稿には、この禹跡圖は鎮江府學に存し、「立石於講堂之西壁」とあるが、昭和十四年八月、清鐵上海事務所の渡邊幸三氏の精査によると、現在何もなく、たゞ壁に碑を抜き去つた形跡を見られた由で、鎮江城内にもその拓本を見ることが出来なかつたのである。

明の嘉靖年間、羅洪先が増補した廣輿圖所載の元の朱思本の自叙によると^⑦

予……尋故迹、…驗滄陽安陸石刻禹跡圖…

とあり、元代には滄陽、安陸に石刻禹跡圖があつたことが知られるが、その後のこの方面の地方志、金石志類を調べたが遂ひにその事實を發見することが出来なかつた。この滄陽は今の河北省の磁縣(宋代の磁州)で、安陸は湖北省安陸縣(宋代の德安府)に當り、前述の諸例から考へると恐らく當時學校のあつた文廟に設立されてゐたものと考へられ、而も石刻禹跡圖であるところから見ると、宋代の建設になるもので、元符三年長安本禹跡圖を刻したものであると推定してもよいであらう。^⑧

以上、西安、鎮江、安陸、滄陽の石刻禹跡圖が宋代漢民族の危期に當り、知識人の集合する學校に建設されたことは、その當時の民族運動に關聯して考へねば理解することは出来ない。

この意味を更に強く證明するものは現に蘇州三元坊の文廟(宋代の平江府學跡)内に存する地理圖である。筆者は去

昭和十四年五月二十日、これを尋ねて、その異状なきを認め、文化資料の保存の完全なるを見て嬉びに耐へなかつた。この地圖に就ては既に詳細な研究が行はれてゐるが、一通りこれを説明すると、縦約六尺一寸、横三尺五寸のプレート質の石碑であつて大成殿前門の壁にはめ込んである。上部三分の二は支那全圖で下部三分の一は銘文である。それによると

右四圖、兼山黃公爲嘉邸翊善、直所進也、致遠舊得此本於蜀司、臬右浙因摹刻、以永其傳、淳祐丁未仲冬、東嘉王致遠書、

とあり、南宋理宗の淳祐七年、浙江東嘉の人王致遠が石刻したものであつて、その原本は王氏が四川にて手に入れた黃公即ち黃裳が嘉王府翊善たる時、時の皇帝光宗に奉つた八圖の中の四圖であつたのである。宣統年間の江蘇金石志稿には、天文、地理、帝王紹運の三圖を蘇州府學に存し、俗に天地人三圖と稱すると云ふ。従つてその當時より一圖を失つてゐたのであるが、現在は帝王紹運圖を失ひ、天文、地理の二圖を存するに過ぎない。

宋史卷三百九十三の列傳第一百五十二の黃裳傳によると、黃裳は光宗に春秋を進講して曰く
今、天下の境土を祖宗の時に比すれば、十分の四にも及ばず

と大いに激勵するところあり、勉學努力を勧めたので、

王意、益々學に向ふ。是に於て八圖を作り、以つて獻上す。曰く大極圖、三才本性圖、皇帝王伯學術圖、九流學術圖、天文圖、地理圖、帝王紹運圖、各その大旨を述べ。

とあり、この地理圖が蘇州文廟にある墜理圖であるのである。従つてこの墜理圖の下部の銘文は黃裳の作と考へられ

るものであつて、現在その文は十分判讀することは出来ないが、江蘇金石志稿所載の文を以つて補足し、要點を記する。次の如くである。^⑩

地理圖(中略)南北形勢、人をして之を觀せしむれば、以つて感ずべく、以つて憤るべし。然れども亦、以つて作興す可き也。(中略)今關より以東、河以南、綿亘萬里、盡く賊區となる、祖宗の開創の勞を追思すれば、流涕太息せざる可けん哉、此を以つて憤る可き也。然りと雖、天地の數として離れば必ず合ひ、合へば必ず離る。一定不易の理あるに非ず、君徳如何のみ(下略)

これ等の文を讀めば、この地圖を奉つた黃裳の意向が明かとなり、全く皇帝光宗の憤起を促したものであることが、その言々折句の中に觀取することが出来る。かゝる由緒ある地圖を蘇州の府學に石刻建立し、學生に示したことは、この建設者王致遠が如何なる人物か明かでないが(恐らく府學教授であらう)、精神作興の目的を以つて行つたことは明かである。そしてこの圖が、金の北支那領有の事實を認めてゐないことは、よくこの圖の意圖してゐるところを示してゐる。

かく、北宋末期より南宋の時代にかけて、中原以南の各地の學校に、漢民族盛時の疆域を示す地圖を石刻して學生等に示したことは、かゝることを可能とする情勢が知識階級間に一般化したことを物語り、又これ等の刺戟によつて、學生の民族運動が活潑となつたであらうことを推測せしめる。

これ等學生の民族運動は結局、時の政府の外交政策の攻撃となり、政府當局者の彈劾、上疏となつて現れたのであ

るが、その最初は北宋末期、最も著しい活躍を示した鎮江の人、太學生陳東(宋史、陳東傳)であつて、その後南宋の高宗の時代に入つて、主戰論者岳飛の没落(紹興十一年)により、妥協派の秦檜が勝ちを占め、その外柔内剛政策によつて國內の積極派は彈壓されて終つた。しかし一方に於ては紹興十三年に岳飛の舊宅に太學を建て(續資治通鑑卷第一百二十六)が如き學生懷柔政策を採つてゐたのである。従つてかゝる政策から考へると、紹興十二年に鎮江府學の教授が禹跡圖石碑を建設することが出来たのも何等怪しむに足らない。

その後、前述の黃裳等の積極教育を受けた光宗の時代には、却つてこの非常時意識が極端に走り、上下、論を鬭すことに熱中する有様であつた。明末清初の學者王船山はその光宗論に於て、^⑩

當時、境を壓する敵なく、帝位を窺ふの宗室なく、篡奪を企つる大臣なく、兵を弄する草莽の士もなく、朝野靜正にして無事に安んじたる時なり。然るに留正は故なくして狼狽し、大臣たるの職を措きて、其の責を百僚に分ち、新進喜言の士を招引し、下は大學高談の子に及べり。一鳴百和、天を呼び、地に叫び、以て昏主妬后と口論を交へ、勝たざれば、相率ひて忽皇として奔り去りぬ。

と述べてゐるが、その論の當否は別として、黃裳の地理圖進呈が、かゝる時代に行はれたことは、その記文の激越であつた理由をよく説明してゐる。

しかし、この學生運動の最も極端に達したのは、理宗の景定、淳祐年間であつて、この淳祐七年、蘇州の府學に、黃裳の地理圖が石刻建設されたことは興味深いことである。この時代の太學生の運動が如何に権力があつたかは、周

密の癸酉雜識後集に、「三學の横、景定淳祐の際に盛まる」とその横暴の有様を述べてゐるが、當時の太學諸生による共同上疏の著しい例としては、蔡之潤を指導者とする百七十三人の學生による宰相史嵩之に對する抗争、黃愷伯を指導者とする百四十四人の學生による上疏等があつたのである⁽¹²⁾。かゝる學生の民族運動を基礎として始めて、南宋の各地に支那全國の地圖が石刻建設された事實の真相が理解されるのである。

結 論

唐宋の頃、一圖幅に表現された支那全國を列記すると次の如くである。

A 賈耽華夷圖

貞元十七年
西曆八〇一年

廣三丈
三丈三尺
率以一寸
折成百里

B 樂黃目華夷圖

宋太宗時代
九七六—九九七年

掌上圖

賈耽の華夷圖を縮少し、太宗の頃までの北宋の地名を修正増補したるものならん。

C 稅安禮古今華夷區域總要圖

元符年間
一〇九八—一一〇〇年

廣三尺
高三尺(?)
方格ナシ

賈耽の華夷圖を十分の一に縮少し、契丹圖を參考にし、元符年間までの北宋の地名を修正増補したるものならん。

D 長安本禹跡圖

元符三年
一一〇〇年

廣三尺
高三尺
每方折

北宋の四京の地名の補修あり。これ又、稅安禮の著作に於て、契丹圖等を資料とし、部分的には光宗時代

C' 黃裳地理圖

南宋光宗時代
一一九〇—一一九四年

廣六尺
高三尺
方格ナシ

稅氏華夷圖の成都にて出版されたもの及び長安本禹跡圖を基礎とし、契丹圖等を資料とし、部分的には光宗時代の地名を補修せり。

宋代の石刻支那全國を列記すると次の如くである。

D' 西安禹跡圖

阜昌七年
一一三七年

廣三尺
高三尺
每方折

京兆府學 長安本禹跡圖に依る(?)

C' 西安華夷圖

阜昌七年
一一三七年

廣三尺
高三尺
方格ナシ

京兆府學 稅氏華夷圖に依る(?)

D' 鎮江禹跡圖 紹興十二年 一一四一年

廣三尺 每方折 鎮江府學 長安本禹跡圖に依る。

D'' 滄陽禹跡圖 阜昌年間 (?)

廣三尺 (?) 每方折 (?) 磁州州學 (?) 長安本禹跡圖に依る (?)

D''' 安陸禹跡圖 紹興年間 (?)

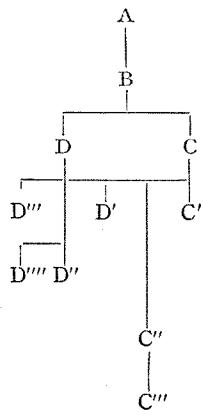
廣三尺 (?) 每方折 (?) 地百里 (?) 德安府學 (?) 長安本禹跡圖に依る (?)

C''' 蘇州墜理圖 淳祐七年 一二四七年

廣三尺三寸 方格ナシ 平江府學 王致遠、一部地名を理宗時代のものに改む。

これ等の十一の地圖の相互關係を推定して、次の如き系統圖を作製した。

西曆年 801 976 997 1100 1137 1141 1190 1194 1247



これ等の石刻支那全圖は皆、北宋滅亡後、各地の學校に建てられたものである。⑩その圖は皆、漢民族の盛時なる唐代の地圖を基礎とし、當時女眞族による北支那領有の現實の事態を認めてゐない。

この二つの事實を結びつける説明は、女眞族に對する漢民族の民族運動に求めなければならない。

國家全圖の如き國家の概略を示す地圖は高等政治政策、又は國民の一般的教養上より外は意味のないものであつて、從來かゝる支那全圖を石刻揭示するが如きは、中華を以つて誇る漢民族にとつては、その必要もなく、従つてかゝる

例を見ることは出来なかつた。

しかるに女眞族の南進によつて漢民族の誇りは傷けられ、民族の危期に直面するや、今迄民族意識など忘れてゐたが如き漢民族も、相ひ對立する民族の存在と云ふ事實を確認し、急速に自己の民族的團結を強固にする必要にせまられるに至つた。かくて當時の知識階級の間に急速に民族意識が昂揚せられ、これを強化する一つの手段として選ばれたものが、漢民族固有の生活圏を示す地圖を、各地の學校に石刻建設し、學生に掲示激勵することであつた。もし當時、印刷技術が進歩してゐたならば、印刷地圖を一般に流布すると云ふ方法を探つたであらうが、未だ技術の未發達の當時としては、前述の如く、知識人の集合する學校に石刻掲示することが、最も容易な宣傳方法であつた。それも最初の間はたゞ支那全圖を掲げ、西安華夷圖の如く歴代の疆域を説明すると云ふ程度に過ぎなかつたが、南宋も末期に近づくに従つて、その民族運動も激烈を極め、遂ひに石刻地圖にも、蘇州地理圖の如く、激越な説明を必要とする情勢となつたのである。

かゝる猛烈な民族運動ありしにも拘らず、外は單に相ひ接する女眞族との鬭争に、内はその政策論議に時をすごしてゐる間に、新興の外部勢力、蒙古族の侵入によつて全く兩者はその生活圏を失ふに至つたのである。

こゝで考へられることは、蔣政権成立以來の猛烈な民族運動であるが、これは南宋の場合と同じく、阿片戰爭以來の歐米勢力の壓迫によつて、久しくその中華を誇つてゐた漢民族が、對等の他民族の存在に覺醒し、特に前回の世界大戰中の民族資本の活動以來、益々民族團結が必要となり、そのためには、當然民族運動は、排外政策に集中せられ、

遂に、相ひ隣接する日支の鬭争となつて終つた。即ちかゝる東亞共榮圏内の鬭争の間に、金、南宋に對する蒙古族の侵入の如き事件が発生しないと誰れが保證出來ようか？

従つて今後の民族運動の指導方針は、東亞共榮圏内の各民族をして、この大東亞共榮圏を各民族共有の大生活圏たるの自覺を持たしめ、彼等諸民族を合一して、一つの東亞民族たるの自覺にまで達せしめなければならない。これを可能ならしめるためには、交通網の整備、アウタルキーの確立等の物的基礎と、言語(ラヂオ、新聞、雜誌)、宗教等による一體觀の確立と云ふ文化的裏づけが必要である。

従つて、もし今頃、東亞圏内の各民族各自が狭き民族主義に従つて、隣接民族を排斥するが如き行動を續けてゐるとすれば、それは宛も、幕末時代に當つて尙、封建主義を固執してゐるが如きもので、その崩壞は期して待つべきものがある。

明治維新は吾々に偉大な教訓を與へる。即ち幕末の日本の民族運動は、各封建領民の意識を攘夷思想によつて、一つの日本民族たるの自覺にまで到達せしめた。而も、日本民族が明治維新によつて一つの團結を完成するや、開國して日本の近代的繁榮の基を築いた。従つて東亞共榮圏内の諸民族は先づ團結して、その外部の諸勢力を排除する方法をとり、次には世界各ブロックに開放して、その繁榮を計らなければならない。

故にこれに對處する地理學的方法の一つは、この東亞共榮圏の成立を不自然に歪める外部勢力の存在を圖示説明し、その内部各民族をして、一つの東亞民族たるの自覺にまで昂揚することであり、(昭和十六年八月十日記)

註① 雜誌「禹貢」に掲載された白眉初の中國國取圖の廣告に曰く、「本圖、於中國全圖上、用各種顏色、表明各國侵佔之迹、並附國取

一覽表、凡學校公署書房住室、均宜懸之屋壁、以作座右銘觀」

② 舊唐書卷百三十八、列傳第八十八、賈耽傳

小川博士、支那歴史地理研究

③ 玉海、卷十四、

淳化四年、詔畫工集諸州圖、用絹一百匹、合而畫之、爲天下圖、藏於秘閣、

④ 禹貢半月刊、第五卷、第三四合期

賀昌羣、漢以後中國人對於世界地理知識之演進

⑤ 金史卷七十七、列傳第十五 劉豫傳

⑥ 湖北金石志、金石十一に湖北省興國の州學にある魯國圖の銘文を載せ、

……敢請於郡、模刻、置大成殿之東廡、庶使朝夕於斯者、得以考聖賢之軌躅、……此圖亦不爲無補、

紹興甲戌四月十五日左迪功郎充興國軍軍學教授俞篔簹識

とあり、漢民族の聖地魯國の圖を學校中の大成殿に石刻掲示したことは、これ又一つの民族運動の現れと見られないことはない。紹興甲戌は二十四年であつて、鎮江禹跡圖より十二年後のことであるが、軍學教授俞篔と府學教授俞篔と何等かの關係があるのではなからうか？

⑦ 朱思本是鐵琴銅劍樓藏書目卷二十二によると江西の臨川の人で、附近の古くより知られた道教の聖地龍虎山、上清觀に於て嚴仁靖真人に教を受け、風水に興味を持ち、天下を周歴し、延祐七年、長廣七尺の地圖を製作し、龍虎山上清觀の三華院に石刻したと云ふ。羅洪先廣輿圖の朱思本自叙によると

予幼讀書；及觀司馬氏周遊天下、慨然慕焉

とあり、道教との關係は何等記さず、

歷韓魏齊魯之郊、結轅燕趙、而京都實在焉、繇是奉天子之命、祠崇高、南至於桐嶺、：尋故迹：每矚以質諸藩府：と公式の命を受け、政府機關と連絡して地圖を製作せることを示してゐるが、元代には別に經世大典地圖の如き官撰の地圖があり、果して彼の自叙の通り信用してよいか疑問である。而も、前述の如く龍虎山に石刻したとすると、蒙古民族壓政下にある漢民族の文化運動の一種と見ることは出来ないであらうか？ 従つて、この圖の記載範圍も、その自叙に云ふ如く

若夫瀕海之東南、沙漠之西北、諸蕃異域、雖朝貢時至、而遠絕罕稽、言之者既不能詳、詳者又未可信、故於斯類、姑用闕如、と、元の大帝國の時代でありながら、ゴビ沙漠以南の大體漢民族の文化圏を圖示し、これ等外域を諸蕃異域と稱した處に、漢民族としての意識が出てゐると思ふ。

⑧ 遼陽は北宋の時は河北西路に當り、滋州と稱せられてゐた處であつて、後に金の南征後、齊に屬してゐた處である。しかも各地の學校に禹跡圖石刻建設の運動が行はれたのが北宋滅亡後の民族運動の一種と考へられる點から見ると、この遼陽の石刻禹跡圖は西安のものと同じく阜昌年間、齊國の時代に建設されたのではないかと考へられる。それは西安華夷圖の「岐學上石」の句であつて、「學に岐け、石に上す」とは齊國內の主要な學校に禹跡圖(長安本)を分配して、石刻せしめたものではないかと推測される。安陸は南宋の領域であつたから、鎮江の府學の禹跡圖と同じ頃、建設されたものと考へても誤りではないであらう。

⑨ 青山定雄、南宋淳祐の石刻墜理圖について(東方學報、東京、第十一冊之一)

青山氏は本圖記載の地名の考證より「本圖は神宗頃唐代の全圖を參考し、契丹圖を併せて作製されたものを原圖とし、後南宋の光宗の世に至つて黄裳が主に北宋末の地名に改めると共に國內の黃汴兩河や新興金の地名その他を改訂増補し、ついで何人かによつて更に一部四川の地名のみ理宗の寶慶年間に至る改制によつて改められたものである」と結論してゐる。

江蘇金石志稿、金石十一に本圖の外に、帝王紹運圖を擧げ、この圖中に歷代各皇帝を記し、黃帝より始り、宋理宗迄を述べ、理宗を今上皇帝と稱してゐる點より本圖は黃裳の原本に非ずとしてゐる。

青山氏の「神宗頃唐代の全圖を參考し、契丹圖を併せて作製されたものを原圖とし」は、元符年間、稅安禮が作製し、後に成都にて出版した古今華夷區域總要圖及び同じく稅安禮の作と考へられる元符三年の長安本禹跡圖ではないかと思ふ。これ等の圖

を基礎とし、部分的に地名を補修して、光宗の時に黃裳は地理圖を製作し、更に理宗時代、四川に遊んだ王致遠が、この黃裳の地圖を得て、この圖を石刻するに當り、自己の見聞した四川の地名を補修したと考へられる。

⑩ この全文は江蘇金石志稿、金石十一、及び青山氏の論文に記載されてゐるので略す。

⑪ 王船山、宋朝史論(邦譯)四四一頁。

⑫ 林語堂、支那に於ける言論の發達(邦譯)七一—七四頁。

⑬ 宋代の地方行政組織は第一級の路の下に、第二級の行政区劃として府、州、軍、監があり、その下に縣があつた。宋代の地方學校組織は原則として、第二級の行政区劃の中心地に建設されたものであつて、即ち寶曆四年(西紀一〇四四年)、州學、軍學、監學を置き、その下の縣には縣學を置いたのであつた。(周子同、中國學校制度)、従つて府には勿論、唐代と同じく府學が置かれたと考へられ、このことは鎮江禹跡圖銘文の府學教授の名でも明かである。當時、西安は京兆府、鎮江は鎮江府、蘇州は平江府、安陸は德安府、禹陽は潞州であるから、西安、鎮江、蘇州、安陸には府學があり、潞陽には州學があつたわけである。その府學の位置は孔子廟(文廟、聖廟)にあつたことは、現に残れる舊地名でも明かであるが、金石萃編所載の京兆府小學規にも、府學榜、准使帖指揮於宣聖廟内……至和元年四月日

とあり、このことを證據立てゝゐる。この儒教と教育との一致の事實は、當然のことではあるが、この方面の専門家が、孔子廟と學校との關係を研究してみたら面白い題目となるであらう。もう一つの面白い問題は支那の地方學校制度の完備し始めたのは宋代からのことであると云ふ事實であつて、北方民族の刺戟によつて民族國家の態勢を備へ始めた宋にとつて必要な施設であつたのであらう。これ又、國民政府成立以後の學校再組織と相ひ應ずるもので、こゝに教育施設と民族運動との關係と云ふ面白い問題も發生する。